

平成 28 年度 第 1 回生徒指導研修会 報告書

研修目標 「知力と活力を培う私学教育」・「SNS 被害から子どもを守る生徒指導」

1. 日 時 平成 28 年 6 月 1 日 (水) 13 : 00 ~

2. 会 場 私学会館 大会議室

3. 参加者 47 名 (参加予定 48 名一名欠席)

4. 日 程 (司会 副部長 神尾慎一先生)

13 : 00 ~ 13 : 30 受付

13 : 30 開会

13 : 30 ~ 13 : 40 挨拶

部長 井出 啓之 先生 (飛龍高等学校 校長)

13 : 40 ~ 15 : 00 講演・ワークショップ

演題 : 「不登校防止を目指したピア・サポート」

講師 : 静岡県立浜松江之島高等学校教諭

山口 権治先生 (上級教育カウンセラー)

15 : 00 ~ 15 : 10 休憩

15 : 10 ~ 15 : 20 平成 27 年度事業報告について

平成 28 年度事業計画について

15 : 30 ~ 16 : 00 地区部会 (東部・中部・西部)

6. 講演内容

1. ピア・サポートの目指すところ

ピア・サポートは、欧米でのいじめについての取り組み、ピア・カウンセリングから発展。様々なトレーニングを通し、人とつながる・つなげるスキルを身に着ける。

教育基本法 第一条に「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」とあり、生徒指導提要には「生徒指導とは、一人ひとりの児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる活動」とある。平和で民主的な社会の形成者として、その社会的資質や行動力を高めるために、一次的「自分でできる力を育てる」、二次的「友達同士で支える力を育てる」、三次的「ハイリスクの子どもを支える」と段階的に分けて考えた場合、「自分で出来る力」を育むのが、道徳教育・人間関係プログラムであり、「ハイリスクの子どもを支える」のは、教員・専門家の役割である。そして「友達同士で支える力を育てる」ための一つの取り組みがピア・サポートである。特に不登校生徒が増加傾向にある現状の中で、一次・二次が充実しないと不登校を減少させることはできない。

高校生対象の調査では、高校生の 75%が、暇な時間に、テレビ、ゲーム、読書、音楽、ネットをしている、と答え、人と直接コミュニケーションをとっていないと答えている。またその理由の一つに、人と会うことで気を使うことが疲れるから、ということがあげられている。人と関わることに消極的で、その力を養ってきていないことがうかがえる。ピア・サポートは人とつながる力を育て、自立につながる力を育てる支援である。

具体的には、

- ・人を助けて、人とつながって成長する。

- ・人に助けられて、人とつながって成長する。
- ・ともに楽しいことをしたり、問題を解決したりして、人とつながって成長する。

ピア・サポートは仲間同士で相互に支えあう活動であるので、ピア・サポートを通し、思いやりのある行動を示せる人間を育て、思いやりのある学校風土・コミュニティを創造することが出来る。

2. なぜピア・サポートなのか

子どもたちを取り巻く状況は、家庭における虐待・離婚・少子化・貧困、学校におけるいじめ・暴力・学級崩壊・学力差、地域における「子どもだけの世界」の消失・遊びの変化、日本全体の高学歴化・塾・競争社会等、子どもが育ちにくい状況となってきた。そのような状況の中で、学校・教師として必要となることは、子どもたちが育つことのできる人間関係という「場」の創造である。

本来、異年齢の集団の中での遊びや経験を通して養われるべき面が、ゲーム等の一人遊びによって発達していないため、自己表現や相手を理解することが適切にできず、苦悩する子どもは多く、苦悩が問題行動として表出している。

そのような中で、相談相手として、子どもたちの76%は、友達に相談している。

教育現場では、子どもの教師も、生徒のもめごとを解決するのは教師の役割だと考えているが、実際には子どもの中に仲裁することのできる子どもを育てることが良い方法だと思われる。また子ども自身も94%が「人の役に立つ人間になりたい」と答えている。人は人を支援する中で成長することや、子どもの傷つきは、子ども同士の中でこそ癒されることから、ピア・サポートが良い方法であると思われる。

3. ピア・サポート・プログラムの構造と実際

(ビデオ)「北海道の学校での取り組み」

ピア・サポートによって、不登校状態から教室に戻ることでできた事例が紹介された。その中で、ピアとして活動した生徒達は、それぞれが自分の出来る範囲で、出来ること(挨拶、そばにいる、共通の趣味の話をする、等)をしていた。

実際のサポートの枠組みが決まると、①練習→②計画→③サポート活動→④振り返り、を通してプログラムの評価を行う。

またサポートにも、共感・愛情の提供を行う「情緒的サポート」、形のあるモノやサービスを提供する「道具的サポート」、アドバイスや情報提供を提供する「情緒的サポート」、肯定的評価を提供する「評価的サポート」といった、多くのサポートの仕方がある。

さらにピア・サポートの活動を通して、参加し、サポートの経験をした側の生徒が成長することが、アンケート結果等からも確認されている。

特にコミュニケーション能力の向上や、より他者を助けたいという意識の向上が見られる。

ピア・サポートは、コミュニケーション能力の育成、対人関係を構築する能力の育成、自己肯定感の醸成などの、教育的効果がある。

これは部活さまざまな集団等にも応用できる。感謝することを教えている指導者のチームは強くなる傾向がある。

また高校生が中学生に対して、中学生が小学生に対してピア・サポートの実習を行うことで、上級学校への進学ギャップを減らすことが出来る。

外国籍児童の多い学校では、保護者を対象としたサポート活動を行うことで、外国籍の保護者同士をつなげることで、子どもの安定した環境へつなげることができる。

ピア・サポートに取り組んだことで変容するステップは、

- ①トレーニングによって相互理解が深まる。
- ②参加者同士の人間関係が良好になる。
- ③活動の場が、安心・安全なものに変容する。
- ④チャレンジする。
- ⑤成長する。

であり、これはアクティブ・ラーニングにとっても有効なステップであり、ピア・サポートはアクティブ・ラーナー（主体的学習者）を生み出すプログラムともいえる。

マズローの欲求階級説における社会的承認欲求は、社会・人と関わることなしには充足されない。ピア・サポート活動によって、その社会的承認欲求が満たされることで、さらに自己実現の欲求を実現する段階へと進むことが出来、さらには思いやりの溢れる学校風土が形成されることにつながっていくだろう。

4. ソーシャルボンド理論

人間を社会集団につなげているものを「ソーシャルボンド」という。

その構成要素は、

- ①アタッチメント（愛着）：集団を取り結ぶ情緒的「絆」
- ②コミットメント：集団から得られる利益を考慮して一種の投資として同調すること。
- ③インボルメント（巻き込み）：日常生活の様々な活動に参加している度合
- ④規範概念：社会の基本的な価値観

学校に当てはめると、

「学校に豊かな人間関係を育てる仕組みがある」

「毎日の授業や行事が、自分の夢や希望の実現につながっていることが実感できる」

「参加型で自治的な学級経営がなされている」

という条件が満たされていると、子どもと学校をつなぐソーシャルボンドがあると言える。

5. まとめ

岡山県の総社市では、ピア・サポートを含んだ取り組みにより、中学生の問題行動が、平成 21 年度には 205 件であったのが、平成 26 年度には 13 件、27 年度には 7 件にまで減少した。また不登校数も大幅に減少した。

ピア・サポート活動を教育活動に取り入れることで、生徒が生徒を助け、助けられ、それぞれが成長する機会となる。またこれまで教員が多くを負っていた部分が軽減されることで、教員が児童生徒に向き合う時間の確保、そして教育のビジョンを持ち、示すことに取り組める環境を整えることが出来る。

【記録：専門委員 聖隷クリストファー中学校・高等学校 教諭 大野 和男】